

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01094

研究課題名(和文) 都市近郊地域歴史像の再構築 - 京都・白川道の研究を基盤として -

研究課題名(英文) Reconstruction of historical image of the suburbs of the Kyoto city based on research on Shirakawa-road

研究代表者

千葉 豊 (Chiba, Yutaka)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00197625

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：京と近江を結ぶ主要街道の一つであった白川道は幕末以降、尾張藩邸の設置ならびに近代の学校建設によって、京都大学吉田キャンパスの箇所が寸断されてしまった。本研究では、この寸断された範囲における発掘調査の成果を分析・検討することによって、白川道の道路としての構造を明らかにし、白川道周辺の土地利用の変遷を復原した。また、江戸時代の絵図や近代に制作された測量図と発掘調査の成果を比較し、白川道およびその周辺がどのような変遷を遂げて現在に至ったのかを総合的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

考古学で道路遺構を発掘することは多いが、道路そのものの構造や年代の追究にとどまり、道路周辺の土地利用までを総合的に分析した事例は少ない。本研究では、平安時代から現在まで継続している道路(白川道)を取り上げて、道路そのものの年代的構造的変遷ばかりでなく、道周辺の土地利用がどのように変遷していったかを発掘調査の成果とともに、江戸時代の絵図類や近代の測量図で分析して、人間と道との関わり方を通時的かつ具体的に追究することができた。

研究成果の概要(英文)：Since the end of the Edo period, Shirakawa Road, which was one of the main roads connecting Kyoto and Omi region, has been cut off at the present Yoshida Campus of Kyoto University due to the establishment of the Owari domain's residence and the subsequent construction of the high school in the early modern period. In this study, by analyzing the accumulated excavation data of, and conducting a new excavation at, this cutoff area, the structure of the Shirakawa Road was clarified and the process of the development of land use around the road was reconstructed. In addition, we compared the results of the analysis of the archaeological data with the historical maps and drawings in the Edo period and the survey maps produced in the modern era. By so doing, we comprehensively examined what kind of changes the Shirakawa road and its surroundings have undergone down to the present.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 都市近郊地域 京都 白川道 道路遺構 尾張藩邸 歴史像 街道

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

道路は、人びとの生活にとって欠かすことのできないものであり、「踏み分け道」「けもの道」のような原初的な道は、早くから成立していたと推測される。我が国では、神奈川県古梅谷遺跡で低湿地に木の枝を並べた縄文時代の木道が見つかるが、街道とも呼べる本格的な道路の造成は古墳時代以降に始まったと考えられる。古代には駅伝制の成立とともに、駅路が開かれ駅家が置かれたことが『令集解』『延喜式』などから知ることができるが、その実態の解明に関しては、歴史地理学的な分析とともに、考古学における道路遺構の発掘調査が大きな貢献を果たしてきた。

このように、街道そのものの研究が進展した一方で、街道とともに存在した地域までを射程に入れた研究は、ほとんど進展していないのが現状である。京都の荒神口から近江へ通じる街道である白川道(図1)は、古代・中世にはその周辺に貴族の邸宅や寺社が建ち並んでいた。また荒廃した際には、織田信長によって改修が命じられたように、京都の発展にとってきわめて重要な街道であった。

白川道という街道が成立することによって、この地域がどのように変化したのか、また白川道の発展と衰退がこの地域の土地利用にどのような影響を与えたのか、反対に白川道周辺地域の発展や衰退は、白川道の変遷に影響を与えているのかという問いかけは、街道と人びとの営みという視座に立って地域の歴史像を解明するうえで、重要で核心的な問いかけになると考えた。

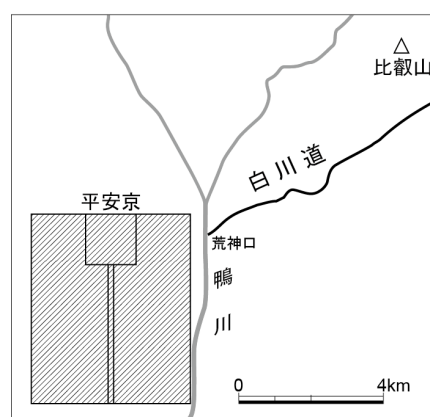


図1 研究対象の地理的位置

2. 研究の目的

本研究の目的は、古代から京と近江を結ぶ主要街道の一つであった白川道に焦点をあて、白川道そのものの技術論的分析と、その周辺地域で展開した土地利用の変遷を実証的に解明することで、古代から近世まで長期にわたって王都であった京都近郊地域の歴史像を具体的に復原することである。

白川道は幕末以降、尾張藩吉田邸ならびに京都大学吉田キャンパスの設置によって寸断されたが、この寸断された範囲においては、白川道が良好な形で保存されていることが判明しており、白川道の道路遺構に関する発掘調査が複数の地点で実施されている。白川道周辺で展開した土地利用の歴史についても、40年以上に及ぶ京都大学吉田キャンパスの発掘調査によって考古学的データの集積が進んでいる。1千年に及ぶ白川道と地域の変遷を詳細かつ克明に復原し、白川道の現在を明らかにする本研究は、街道と人びとの営みという視点から新たな歴史像を構築することにつながると考えている。

上記の目的を達成するために、以下に記す4つの具体的な課題を設定した。

課題1：考古学データに基づく白川道およびその周辺地域の歴史の変遷の復原

課題2：発掘調査による古代・中世の白川道および幕末の土地利用の解明

課題3：文献・古図に基づく白川道および周辺地域の検討

課題4：文化的景観・文化的資源としての白川道の価値

3. 研究の方法

考古学的な研究手法を主体にしつつも、文献史料の集成・分析、絵図・測量図の読み取り、現地踏査なども積極的に実施して、総合的な分析を目指した。過去の発掘調査資料から、道路遺構を集成し、分析する作業を通して、道路の性格を解明する作業を進めるとともに、新たな発掘調査を実施して、中世白川道のルートと幕末尾張藩邸の東を画する堀跡を確定させた。

考古学的分析を進める一方で、江戸時代に京都の町奉行所によって布達された「触」のなかに出てくる白川道関連史料を渉猟し、基礎データの収集を進め、『山城国吉田村古図』『賀茂川筋絵図』などの絵図や『雍州府志』などの地誌、さらには近代作成の測量図や都市計画図などの解読作業を通して、白川道と周辺地域の様相の解明に努めた。

白川道は寸断されているとはいえ、現在でも道として機能している部分があり、そうした部分については、現況を写真撮影して記録に残した。歴史の道として白川道を評価するために、大分県別府市街地の沿岸古道やガンダーラ(パキスタン)の古代道路を踏査して記録にとどめるとともに、文化的景観・文化的資源という視点からの分析をおこなった。

4. 研究成果

それぞれ4つの課題に関連して得られた研究成果は、以下の通りである。

(1) 課題1：考古学データに基づく白川道およびその周辺地域の歴史的変遷の復原

京都大学吉田キャンパスで過去におこなわれた発掘調査の成果から白川道を中心とした道路遺構について悉皆的にデータを収集し、その特徴を分析した。舗装や側溝、轍の有無などを指標にA～Fに分類し、大学構内で発見された道路遺構を分類した〔伊藤 2020〕。

1980年に発掘調査された京都大学本部構内A X 28 区の廃棄土坑S K 51 より出土した中世遺物の整理作業を実施した。S K 51 からは13世紀代の土師器・陶磁器が多量に出土しており、大半が未整理のままであった。これらは、白川道北辺に居住した吉田氏に関わるものであり、白川道沿いに居住した貴族の様相を知る上での重要な基礎資料とすることができた〔伊藤・長尾 2022〕。

国内で実施された道路遺構に関する考古学的な発掘調査について、「全国遺跡報告総覧」を用いて約2000件のデータを収集し、道路遺構を比較するための基礎データを作成した。

(2) 課題2：発掘調査による古代・中世の白川道および幕末の土地利用の解明

発掘調査を進めるにあたり効率的かつ効果的に発掘調査を実施するため、初年度に天理大学文学部歴史文化学科の協力のもと、遺跡レーダ探査を実施した。これにより、どの地点を発掘調査するのが適切かに関して基礎的知見を得ることができた〔岸田徹ほか 2022〕。

遺跡レーダ探査の結果を受けて、2年度には中世白川道および尾張藩邸の東を画する堀の確認を目的として、発掘調査を実施した(2020年12月21日～12月25日)。調査地点は本部構内中央の2箇所と同・東端の1箇所である。文学部東館中庭の調査地点では、藩邸の堀跡に対比できる可能性のある落ち込みを発見したが、攪乱が激しく確定することはできなかった。中世白川道は本部構内東端で、良好な形で残存していることを確認しそのルートを確定させることができた。最終年度には、前年度の文学部東館中庭で確認した落ち込みの性格を解明することを目的に発掘調査を実施した(2021年7月28日～7月31日)。その結果、前年度確認した落ち込みは、幅3.3m以上、深さ1mで南北方向に伸びる大溝であることが明らかになり、幕末に設置された尾張藩吉田邸の東を限る堀跡である可能性が高まった〔内記 2022〕。

幕末期の自然環境の復原を目的として、2021年の発掘調査で検出した大溝の最下部に

堆積していた粘土を採取して花粉分析と大型植物遺体の分析を(株)パレオ・ラボに依頼して実施し〔パレオ・ラボ 2022〕、その結果を検討した〔冨井 2022〕。

(3) 課題 3 : 文献・古図に基づく白川道および周辺地域の検討

京都大学文書館が所蔵する「山城國愛宕郡吉田村地内第三高等学校豫定敷地實測図」を調査した。この実測図は、現・京都大学本部構内の地に明治 20 年、第三高等学校が移転するさいに作成されたもので、尾張藩吉田邸が明治 3 年に廃絶した後の土地利用のありかたに関して、新たな知見を得ることができた〔千葉 2021〕。

江戸時代に京都の町奉行所によって布達された「触」のなかに出てくる白川道関連史料を渉猟し、基礎データの収集を終了した。また、京都大学総合博物館が所蔵する「山城国吉田村古図」に見える小字名・地番・面積・名請人などを釈読し、古図そのものはデジタルトレースして、分析のための基礎作業を終えた。

最終年度には、「山城国吉田村古図」に加え、「賀茂川筋絵図」(京都市歴史資料館蔵)、「愛宕郡田中村耕地絵図」(京都府立京都学・歴彩館蔵)など江戸時代の絵図類や近代都市計画図を分析し、発掘調査の成果とも比較検討して、鴨東地域の水利の実態を明らかにすることができた〔千葉 2022〕。

(4) 課題 4 : 文化的景観・文化的資源としての白川道の価値

現在も道路として機能している箇所に関しては、初年度から最終年度にかけて、継続的に踏査をおこない、現況を写真撮影し記録した。

文化的景観・文化資源として白川道を評価するという視点を獲得するため、国内国外の古道の踏査を実施し、それぞれの地域でどのように存在しているか調査した。初年度は、ガンダーラ地方の古代集落間を結ぶ山道の踏査、2 年度は、大分県別府市街地の沿岸古道の調査を実施した。ガンダーラ(パキスタン)の古代道路の調査成果として、仏教僧玄奘が訪れたタキシラにある都城と仏寺の立地に関する新たな仮説をオリエント学会で口頭発表し、論文として公開した〔内記 2020・2021〕。

なお、研究成果については最終年度に報告書を刊行した(『都市近郊地域歴史像の再構築

京都・白川道の研究を基盤として』2022 年 3 月、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI よりオープンアクセス <http://hdl.handle.net/2433/270367>)。また、アウトリーチ活動として、初年度に「京都大学アカデミックデイ 2019」に参加、最終年度に京都大学総合博物館で「埋もれた古道を探る」と題した研究展示(2021 年 3 月 15 日~5 月 15 日)を企画して、一般向けの成果発信をおこなった。

引用文献

伊藤淳史 2020「道路遺構の考古学的検討に向けて 京都大学構内遺跡での検出事例から」

『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018 年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門、pp.127-137

伊藤淳史・長尾玲 2022「白川道沿いの大規模廃棄土坑 本部構内 A X28 区 S K51 の出土資料」『都市近郊地域歴史像の再構築』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、pp.103-128

岸田徹・橋本英将・小田木治太郎・桑原久男・天理大学遺蹟調査チーム 2022「京都大学構内遺跡における部地理探査の成果」『都市近郊地域歴史像の再構築』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、pp.63-68

千葉 豊 2021「第三高等学校移転時に作成された測量図と派生する諸問題 京都大学吉田

キャンパスにおける土地利用の一瞥」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2019 年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門、pp.195-215

千葉 豊 2022「砂川と弥勒川 比叡山西南麓における水利の一考察」『都市近郊地域歴史像の再構築』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、pp.30-62

富井 眞 2022「尾張藩邸東堀の最下層堆積物の自然科学的分析について」『都市近郊地域歴史像の再構築』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、pp.96-101

内記 理 2021「『大唐西域記』記載のタクシャシラの仏塔についての再検討」オリント学会第 63 回年次大会口頭発表

内記 理 2022「玄奘が見たタクシラの都城と仏塔」『オリント』第 64 巻第 2 号、pp.217-232

パレオ・ラボ 2022「自然科学的分析」『都市近郊地域歴史像の再構築』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター、pp.88-95

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊藤淳史	4. 巻 2018年度
2. 論文標題 道路遺構の考古学的検討に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都大学構内遺跡調査研究年報	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉豊	4. 巻 2019年度
2. 論文標題 第三高等学校移転時に作成された測量図と派生する諸問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都大学構内遺跡調査研究年報	6. 最初と最後の頁 195-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内記理	4. 巻 64-2
2. 論文標題 玄奘が見たタキシラの都城と仏塔	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 オリент	6. 最初と最後の頁 217-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 千葉豊 伊藤淳史 富井眞 笹川尚紀 内記理
2. 発表標題 都市近郊地域歴史像の再構築に向けて
3. 学会等名 考古学研究会第66回研究集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 千葉豊・伊藤淳史・富井眞・内記理	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター	5. 総ページ数 129
3. 書名 都市近郊地域歴史像の再構築 - 京都・白川道の研究を基盤として -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門 https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/index-arc.html 京都大学アカデミックデイ2019 大学の地下から考える地域の歴史 http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2019/6/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 淳史 (Ito Atsushi) (70252400)	京都大学・文学研究科・助教 (14301)	
研究分担者	富井 眞 (Tomii Makoto) (00293845)	京都大学・文学研究科・助教 (14301)	
研究分担者	笹川 尚紀 (Sasakawa Naoki) (00456807)	京都大学・文学研究科・助教 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	内記 理 (Naiki Satoshi) (90726233)	京都大学・文学研究科・助教 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関